研究棟の研究施設

私たち人間にどのような異変が環境ホルモンと関連して起こっているかは、まだ十分に解明されていませんが、いろいろなことが心配されています。例えば最近の若い男性の精子の数が減少しているとか、精巣腫瘍等の生殖器ガンが増加しているとか、女性の子宮内膜症が著しく増加しているのは関係があるのではないかとか、更には最近の子供達がきれやすいとか学習能力の低下しているのではないかということが環境ホルモンのせいではないか等々です。野生生物でみられる異変が必ずしも人間に同じようにおこる訳ではありませんが、人類の未来への心配に理由がない訳ではありません。

天然物を含め、微量な物質が内分泌撹乱という径を通して、野生の生物や私達人間にどのような影響を与えているのか、もし影響があるとすれば、それを防御するにはどうすれば良いかを調べることは大切な研究です。一方とても難しい研究対象です。国内外の多くの研究者の参加によって、今後解明されていくものでしょう。

本研究棟は、国立環境研究所の研究者ばかりでなく、国内外の研究者に開かれた研究スペースとして、また環境ホルモンについてのいろいろな研究情報の交差点として機能しています。

● 環境ホルモン総合研究棟の研究施設概要 ●

延べ床面積	約5200m²
構造	鉄筋コンクリート4階建て
主要施設	海水及び淡水実験ゾーン
	化学・実験ゾーン（計測・共同実験）
	動物実験ゾーン
	情報ゾーン
主要設備	超高磁場核磁気共鳴イメージング装置（MRI）
	核磁気共鳴分析装置（NMR）
	液体クロマトグラフ質量分析装置（LC/MS/MS）

情報ゾーン

超高磁場核磁気共鳴イメージ装置（MRI）

核磁気共鳴分析装置（NMR）